

佐藤多恵子さん 遺句作品

前田秀一

令和四年「冬季・新年俳句会」投句ご案内の中、十二月十二日、村元伸行さん（元三丘七期会幹事長）から佐藤多恵子さんが十一月十六日に急逝された旨訃報が届きました。

佐藤多恵子さんの句歴については、当会ホームページ「会員交流の『場』」に「俳句結社『京鹿子』編『歳時記』への道」と題して思いを込めて紹介されています。

生前のお話しでは、俳句創作活動の後、在学中にご指導を仰いだ山本初枝先生（国語担当教諭）に師事され、短歌の道に進まれました。その成果を『歌集 郭公よ啼け』二〇〇〇（短歌研究社）および『歌集 大きな傘』二〇一七（青磁社）（堺市立図書館所蔵）にまとめられ上梓されました。

村元伸行さんから、『歌集 郭公よ啼け』から三丘七期会・外遊び会が山の辺の道を歩いた際に佐藤多恵子さんが詠まれた歌をご紹介します。



『山の辺の道』を詠む

千七百年神獸鏡を秘めて来し里塚の濠人を隔てる

盤龍鏡は枕辺に割れ鉄剣は脇に朽ちたり 人骨は無く

三角縁神獸鏡はよもぎ色平成十年の白日の下

三角縁神獸鏡の全きが打ち重なりて緑青を噴く

水銀朱は割竹形の棺底になお血の色す 被葬者不詳

明日香なる狂たぶれ心の渠跡みぞあとの藪騒めかす如月の風

酒船の遺跡に出でし大石亀ひとすぢ昨夜の雨を残せる

石の亀の飲む水槽の上澄みは尾へ流れゆきその先は謎

石舞台の中はがらんどろ薄日洩れなめぐしの跡光らせてをり

二上より吹き来る風に浄まりて紫雲英(げんげ)ばたけの濃淡移る

朱の宮青葉の光とく辺に蘇我の入鹿の首飛ぶ松巻

多武峰楓の花のうす紅に歳月は透く 大化の改新